

銀の笛と金の毛皮

豊島与志雄

青空文庫

むかし、あるところに、エキモスという羊飼いの少年がいました。父も母もないみなし児で、毎日、羊のむれの番をしてくらしていました。

青々とした野原に、羊たちはたのしくあそんでいます。野の花のあいだに、うつくしい蝶がとびまわっています。木立こたちのなかや空たかくに、いろんな鳥がさええずついています。日がうららかにてついています。

エキモスは草の上にねころんで、歌をうたいました。口笛をふきました。草の葉でいろいろな笛をこしらえました。葦あしの茎くきでも笛をこしらえました。

——自分も、あの小鳥のようにうたいたい。けれども、いくらうたつても、笛をふいても、小鳥にはおよびませんでした。

そのうちに、ある日エキモスは、葦のしげみのなかに、まっ白な葦を一本みつけました。太くてまっすぐのびて、白く銀のように光っています。エキモスはめずらしさに、しばらくぼんやりながめていましたが、ふと、かんがえました。

——あれで、笛をこしらえたら……。

すぐに、ナイフで、その葦あしをきりとつて、笛をこしらえました。そしてふいてみました。が、少しもなりません。葦笛はただ銀のようにひかっているだけでした。

エキモスはがっかりしました。けれども力をおとしませんでした。次の節ふしでまた笛をこしらえました。がそれもなりませんでした。

三つ、四つ、五つ……いくら笛をこしらえても、どれ一つとしてなるものはありませんでした。けれど、笛がならなければならぬほど、エキモスはなお一生けんめいに、笛をつくりました。今にすばらしいのできる、とそんな気がしました。

とうとうさいごの一節になりました。それでだめだったら、もうまっ白なめずらしい葦もなくなくなってしまふのです。

「おう、神さま！」

とエキモスはさけびました。あらんかぎりの心をこめて、さいごの笛をこしらえました。そしてこわごわ、ふいてみますと……。

エキモスはおどりがりました。うれしさに涙ぐみました。なります、なります。なんともたとえようのない美しい音ねがします。

エキモスは涙をながしながら、銀色に光るその葦笛をながめました。そしてまた口にあてました。ふきならしました。なんとという美しい音でしょう。小鳥のさえずりにもまけません。

エキモスは笛をうちふりながら、野原のなかをかけまわりました。それから森のはずれの木かげにねころびました。そしていろんな歌をむちゆうになってふきつづけました。

するうちに、ふと、気がつくど、羊たちがいつのまにかあつまってきました。木の上には、多くの小鳥がじつとまっています。エキモスはほほえみました。羊や小鳥があつまってきた、自分の笛をきいていてくれることが、とてもうれしかったです。

ところが、羊と小鳥だけならよいが……。エキモスはびつくりしてとび上がりました。森の中に、どこから出てきたのか、さる猿、おおかみ狼、きつね狐、のうさぎ野兎、しか鹿、しし獅子、たか鷹、わし鷲など、いろんな鳥や獣が、あちらこちらにうずくまっています。

エキモスはどうしていいかわかりませんでした。ことに狼や獅子にはびつくりしました。羊や自分も食われてしまうかもしれない。彼はもう笛のこともわすれて、あとずさりしながら、羊のむれのなかににげこみました。がそのおそろしい獣たちは、じつとうずくまっていたまま、おっかけてはきませんでした。やさしい眼をして見おくっているだけでした。

エキモスは鈴をならして、羊のむれをつれて小屋へかえっていききました。

翌日、エキモスはまた羊のむれをつれて、野原にでました。おそろしい鳥や獣はいませんでした。エキモスは安心して、羊たちを野原のなかにちらばして、自分は木かげにやすんで、白い葦あしづえ笛をふきはじめました。とても自分がふいているのだとはおもわれないほど美しい音ねでした。天からひびいてくるような歌でした。

そのうちに、笛の音をききつけて、羊たちは近くにあつまってきました。小鳥たちもとんできました。みんなだまつてきいています。それからなお、森のおくの方から、いろいろな鳥や獣けだものがでてきました。狼おおかみや獅子ししのようなおそろしいのもでてきました。がエキモスはさほどおどろきませんでした。ただ笛をききにでてきたのだということが、そのようすでよくわかりました。

獣のうちに、五六ぴきの鹿しかがいました。大きな角つのの頭をかしげて、笛にききいつています。そのまんなかにも、ひときわ大きいのが一ついて、角のかわりに獅子のようながいたてがみがはえ、全身の毛が金色に光っていて、眼が青々とすみきっていました。

その金の毛の大きな鹿には、エキモスもびっくりしました。そんな鹿は、これまで見たこともなければ、話にもきいたこともありません。エキモスが笛をやめて、うっとりみと

れますと、鹿はその青くすみきった眼で、わらっているようでした。

エキモスは鹿のそばにやっていきました。金色のふさふさしたたてがみをなでてやりました。鹿はうれしそうにすりよってきます。エキモスが笛をふきだすと、鹿はそばにすわっていきいっています。そうして、エキモスと金色の鹿とは、いちばんなかのよいともだちになりました。

エキモスにとつては、何もうれしいことばかりでした。白い葦あしがえ笛はいくらふいてもあきません。笛をふくと多くの鳥や獣がそれをききにでてきます。みんな仲よくして、ただ笛をきいているだけです。そのなかで、金色の鹿が王さまのように光っています。エキモスはいつもその鹿とつれだつてあるきます。夕方になると、獣たちは森のおくに、鳥たちは空たかく、そしてエキモスと羊たちは小屋に、それぞれかえってゆくのです。毎日うらかに日がたつて、野にはいろんな花がさいています。

ところが、ある日、金色の鹿がすがたをみせませんでした。ほかの鳥や獣はでてきましたが、金色の鹿しかだけは、エキモスがいくら笛をふいても、夕方までまってもでてきませんでした。

その翌日も、金色の鹿はやはりでてきませんでした。エキモスは心配になりました。そ

れからかなしくなりました。もう笛をふく気もしませんでした。——金色の鹿はどうしたろう！ エキモスはそのことばかり考えました。

二

金色の鹿がでてこなくなつてから三日目の朝、エキモスはもう何のたのしみもなく、ただいつもの仕事をして、羊のむれをつれて野原にでました。葦あしぐえ笛をふく気にもなれませんでした。

すると、エキモスがやってくるのをまちうけてでもいたかのように、多くの鹿が森からかけだしてきました。そのうちの一つが、エキモスの上衣うわぎのはしをくわえて、しきりに森の方へひつぱります。

何か用があるんだな、とエキモスは思いました。といっしよに、金色の鹿のことが胸にうかびました。もうじつとはしていられません。羊のむれをそこにのこして、鹿につられて森のなかにはいっていきました。

森のおくふかくなると、人のおつた道もありません。それに、崖があったり坂があつ

たりします。エキモスは一生けんめいに歩きましたが、やがてつかれてきて、足がうごかなくなりました。すると、大きな角つののはえた鹿が、エキモスの前にかがんで、背なかをさしだしました。エキモスはその背にのつて、しつかと角にしがみつきました。鹿は走るように早く歩きだしました。

うちひらけたところにてたり、森にはいつたり、坂をのぼったり、谷川をわたったりしました。どれくらいきたのかわかりませんが、山ふかいところで、ふいに、谷川のそばの平地にでました。やわらかな草がいちめんにはえて、何ともいえぬよい香りの花がさいています。そしてたくさんの鹿しかがでむかえています。

その平地のおくの、崖がけの下のとこに、エキモスは鹿の背からおろされました。みると、すぐそのの、草の上に、あの金色の鹿がよこたわっていました。エキモスは声をたててかけよりました。

金色の鹿は、そこによこたわったまま、身うごきも出来ませんでした。とぎれとぎれに、かすかな息をして、じつとエキモスの方をみているだけでした。しらべてみますと、肩のあたりから血が流れています。鉄砲でうたれたらしいんです。もうてあてのしようもありません。死にかけているんです。

エキモスはかなしさに涙ぐんで、そのそばにすわって、膝ひざのうえに頭をのせてやりました。鹿はうれしそうに眼をつぶりました。エキモスは、その獅子ししのようにながいたてがみをなでてやりました。それから白い葦あしづえ笛をとりだして、さいごのわかれにふいてきかせました。

エキモスが心をこめてふく葦あしづえ笛は、とてもいいあらわせない美しいひびきをたてました。谷川の水も、しばらくながれやんで、ききいりました。

エキモスが笛をふきやめると、もう、金色の鹿は死んでいました。

エキモスはそのまま、ながいあいだすわっていました。それから、金色の毛皮をすこし、かたみに切りとりました。そして死体を、その崖がけの下にうずめてやりました。

エキモスが帰りかけると、また、多くの鹿しかがおともをして、角つのの大きな鹿がエキモスを背なかにのせてくれました。そして、崖がけや坂や谷川や森をこして、もとの野原にもどってきました。

羊のむれは、しずかに草をたべています。蝶はとんでいます。小鳥はさえずっています。けれど、エキモスは気がはれませんでした。金色の鹿のかたみの毛皮で、だいいなものを入れる袋をつくって、腰こしにさげましたが、かなしさはまぎれません。笛をふく気にも、と

てもなれません。

——だが、あの鹿を、鉄砲でうったんだらう。

そう考えると、くやしかったり、さびしかったりして、どこか旅にでもでてしまいたくなりしました。羊たちもかわいいけれど、金色の鹿が死んだかなしみのの方が、もつとつようございました。

エキモスはついに決心して、主人のところへ行って、ひまをもらいたいと願いました。主人はエキモスをひきとめたがりました。けれど、その話をきき、そのかなしみと決心とをみて、願いをゆるしてくれました。

「それでは、都でも見物してくるがよい」と主人はいいました。「都にはいろいろおもしろいことがあるから、気ははれるかもしれない。けれど、おもしろいのはうわべだけで、ずいぶん悪い人が多いから、気をつけなければいけないよ。そして、また戻ってきたくなったら、いつでも戻っておいで、使つてあげるから」

エキモスはお礼をいって、主人からもらったお金を毛皮の袋にいれ、白く銀色に光る葦あしづえ笛をもつて、ほかにはなんの荷物もなく、つれもなく、ぼんやりでかけました。

だいぶいつてから、エキモスは、道ばたの木かげに休みました。そしてはじめて、どち

らへいったものかと考えました。主人がいうように、都へゆくのもいいかもしれないと思
いました。

——だが、都へゆけば、お金がたくさんいるだろう。これだけでたりるかしら。

エキモスは皮袋かわぶくろをひらいて、主人からもらったお金をかんじようしかけました。そ
してびっくりしました。皮袋のなかのお金は、みんな金貨ばかりでした。でも、そんな
ずはありません。主人からもらった時はたしかに、銀貨や銅貨もまじっていました。それ
が、みな金貨ばかりになっているのです。

エキモスにはわけがわかりませんでした。ふしぎそうに皮袋をながめました。

——もしかしたら、あの金色の鹿しかの毛皮だから……。

ためしに、道の小石をひろって、皮袋に入れてみました。とりだしてみると、それが、
黄金こがねになっています。

エキモスはびっくりして立ち上がりました。いくつ小石をいれても、とりだすと黄金に
なっています。それがおもしろくて、やたらに小石を黄金にしては、四方しほうになげちらしま
した。

——ふしぎな皮袋だ。あの金色の鹿の毛皮でこしらえたのだ。

それさえあれば、都にいつでも不自由はしません。エキモスは都に行くことにきめました。

ふしぎな皮袋とふしぎな葦^{あしがえ}笛……。エキモスは、にわかにな元気がでてきました。そして都をさしてやっていきました。

三

まだ汽車や飛行機のないころのことです。エキモスは、いく日かのんきな旅をして、ようやく都につきました。

大きなりっぱな家が、たちならんでいました。うつくしいものが、店いっぱいにかぎってありました。そしてなによりも、人間が多いのにエキモスはびっくりしました。蟻^{あり}のすをつついたように、たくさんの人がいそがしそうにあるきまわっていました。

夕方になると、いちめんに灯がともって、町はいっそうきれいになり、うつくしくきかざった人が、いっそう多くなりました。

エキモスははらがすいてきましたので、あるりっぱなホテルにはいっていきました。び

かぴかひかるガラス戸のおくに、白い服をきた男がたっていました。そしてエキモスのよすを、じろじろながめて、いいました。

「ここは、お前さんのような者がくるところではない。食事がしたいんなら、ほかをたずねてごらん」

エキモスは外に出ました。しばらくゆくと、また、うつくしくきかざった人たちが出入りしてる、りっぱなホテルがありました。そこにはいつていくと、ガラス戸のおくの白い服の男が、エキモスのよすをみながらいいました。

「ここは、お前さんのような者がくるところではない。食事がしたいんなら、ほかをたずねてごらん」

エキモスはうなだれて外にでました。

ぼんやりあるいてみると、なおいくつも、りっぱなホテルが、ならんでいましたけれど、もうはいつてみる気もしませんでした。

——どうして、食事をさせてくれないんだろう。

そう思うと、なおはらがすいてきますし、かなしくなりました。

いつのまにか、大きな川のふちにでました。川には、むこうがわの灯がちらちらうつつ

て、きれいでしたが、川のふちは、人どおりもすくなく、うすぐらくて、ひっそりしていました。

しばらくゆくと、すこしひろいところがあつて、大きな木が四五本うわつていて、そのなかに、ちいさな噴水ふんすいがありました。ふるいきたない服をきて、靴もはかず、帽子ぼうしもかぶらないでいる、年をとった男が、噴水の水をのんでいました。

エキモスは、はらがすいていますし、のどもかわいていましたので、その男にたずねました。

「その水は、だれでものんでいいんですか」

年とった男は、ふりむいてこたえました。

「のんでいいとも。だが、うまい水じゃあないよ」

でも、エキモスはうまそうにのみました。そのようすをみて、年とった男はいいました。「お前さんも、どうやら、はらがすいてるようだね」

「ええ」とエキモスはこたえました。「どこでも、たべさしてくれないんです」

「どこでも……」

エキモスは、りっぱなホテルから、おいだされた話をしました。年とった男はわらいま

した。

「そりゃあ、そうしたもんだよ。お前さんみたいな、きたないなりをした子供に、あんなところで食事をさせてくれるものかね」

「だって僕、お金はもってるんですよ」

エキモスは、皮袋かわぶくろから金貨を一つとりだして、みせました。

「ほう」

男はふしぎそうに、金貨とエキモスの顔をみくらべています。エキモスはいいました。

「おじさん、どこか、これだなにかをたばさせてくれるところはありますか。おじさんもおなががすいているんなら、いつしよにたべましょうよ」

「なるほど、それもいいが……」と男はかんがえながらいいました。「二人きりでたべるのは、すこしもつたいたいな」

「ほかにもまだ、おなかのすいてる人があるんですか」

「あるとも、たくさんあるよ。からだが変わるかったり、靴がなかつたりして、しごとをしにでかけられない者が、いくらもあるからね」

「じゃあ、そんな人とみんな、たべましょうよ」

年とつた男は、とてもうれしそうな顔をしました。きゆうにげんきになって、かけだしていききました。しばらくすると、十四五人の男たちをつれて、もどってきました。靴のないう者ややせほそつた者で、みんなしょんぼりしていました。年とつた男は、エキモスをさしてさげびました。

「この人が、おれたちにごちそうしてくださいさろうという、神さまのお使いだ」

人々は、エキモスをまんなかにかこんで、うれしそうにあるいききました。うらどおりのせまい町すじを、右にまがつたり、左にまがつたりして、やがて、ちいさなたべもの屋にはいりました。

天てんじょう井のひくい、きたない部屋で、木のテーブルと木のこしかけとがならんでいて、ランプがくすぶっていました。でも、そこにいっぱいになった人々の顔は、どんなうつくしいあかりよりも、もつとはればれとかがやいていました。

エキモスは、部屋のおくにたっている主人のところについて、皮かわぶくろ袋から金貨を五つとりだして、かんじよう台のうえにならべました。

「これで、みんなの人に、うまいごちそうをしてください」

主人は、びつくりしたようすをしました。そして五つの金貨をとって、皆の方へそれを

うちふりました。

「おい、みなさん、これだけのごちそうだよ」

わーつとよろこびの声があがりました。

声がなくて、涙ぐんでる者もありました。エキモスもうれしくて、涙がでてきました。酒ができました。ごちそうができました。たいへんなさわぎでした。みんな元気になりました。やせほそった病気の者も、あしたから仕事へでかけるといいだします。みんなが仕事のことをはなします。エキモスはまた金貨をとりだして、靴のない人たちのために、靴をかってきてもらいました。みんなが、あしたからは、自分たちだけで、都じゅうの仕事をするような、元気です。そしてはらいつばいに、のんだりたべたりしました。

しまいには、「神さまのお使い」のエキモスを胴上げして、よろこびさわぎました。

夜がふけました。エキモスがねむそうな眼になりますと、たべもの屋の主人は、そまつな家ですが、そのなかのいちばんよい部屋につれていって、ねかしてやりました。

四

エキモスはたのしく眼をさしました。ゆうべのことをかかんがえると、うれしくてたまりませんでした。あの人たちが、あんなによろこんで元気よく食事をしたことは、いままでありませんでした。

エキモスはたくさんの金貨を宿の主人にあずけて、ゆうべの人たちがきたら食事をさせてくれるようにたのんで、都のなかを見物にでかけました。

いろいろな店がありました。いろいろな人がとおっていました。公園や博物館などもありました。

夕方はやく、エキモスは宿にかえつて、ゆうべの人たちをまちうけました。が、その人たちは、夜になって、二三人ずつ、つれだつてやってきまして、お礼をいっただけで、もどつていきました。

エキモスは宿の主人にたずねました。

「あの人たちは、なぜ早くかえつてしまふんだろう」

主人はこたえました。

「それはむりもありませんよ。一日はたらいいたんだから、くたびれているんです。それに、あなたにごちそうになつては、すまないと思つているんです。あの人たちはもう大丈夫で

す。けれど、びんぼうで、おおせい子供があつたり、病氣だつたりして、ひどくこまつてる人が、まだまだたくさんあります。その人たちをみんなたすけてやることは、いくらあなたも神さまのお使いだつて、なかなかできませんまい」

主人は頭をふつて、かなしそうな顔をしました。

「僕は神さまのお使いなんかじゃないんですよ」とエキモスはいいました。「けれど、こまつてる人たちがそんなにあるなら、どうかして、よろこばしてあげたいもんだなあ」

エキモスはいろいろかんがえました。そして、金貨でちよつとしたものを買つては、おつりに銀貨や銅貨をもらい、それを金色の鹿しかの毛皮でこしらえた袋にいれて、みんな金貨にしてしまいました。たくさんのお金もできました。それをもつて、エキモスは毎晩おそく、びんぼうな人たちのすんでるところへ、でかけていきました。

びんぼうな人たちのところでは、ふしぎなことがおこりました。

病氣で仕事ができなくて、お金がないので、ものもたべられず、どうしていいかわからないでいる男が、ぼんやり外にたっていますと、そまつなりをした少年が、これぞうまいものをおあがりなさいといつて、金貨を一つくれます。男はあつげにとられてるうちに、少年はもうどこかへいつてしまいます。

靴をもたない子供が、はだしで使いにいきますと、そまつななりをした少年が、これで靴をおかいなさいといって、金貨を一つくれます。

窓のガラスがこわれたまま、それをあらたにかうことができなくて、紙をはつてるところがありますと、夜おそく、おもいたいものがなげつけられます。紙がやぶけて、金貨がばらばらと部屋のなかにふつてきます。

それからある朝、まだくらしいうちに、戸をどんどんたたたく者があります。一けん一けん戸をたたいていきます。どのうちでも眼をさまします。なにごとかと思つて、おもてでてみますと、そこに、たくさんの金貨がふりまかれています。みんながとびだしてきて、その金貨をひろいます。

どのうちにも、金貨がたまつていきました。みんな元気になりました。じようになるものをたべますし、帽子ぼうしや靴もかいました。男たちは、いさんではたらきにでかけますし、女たちは、家の中をきれいにします。みんなの、しよんぼりした眼はいきいきとかがやいてきます。町じゆうに元気があふれてきました。

それがみな、エキモスのしわざでした。みなの人にもそれはわかっていました。けれど、エキモスを神さまのお使いだとおもっていましたので、おもてだつてお礼に行くこともお

そろしいような気がして、ただかげで、ありがたがって、ひそひそとうわさするだけでした。

それでも、お菓子や果物などを、エキモスの宿に、そつとどけにくる者がたえませんでした。いくらことわつても、またそつとおいていきます。それには、宿の主人がいちばんこまりました。うちのなかはお菓子や果物でいっぱいです。しかたがありませんから、ほうぼう知りあいのうちにくばりましたが、しまいには、どこうちでもかまわずやたらに、それをくばつてあるきました。そのためにまた、どこうちにも、お菓子や果物があるようになりました。

びんぼうな子供たちはほんとにうれしがりました。これまであおい顔をしてうちにばかりひっこんでいたのが、お菓子や果物をたくさんたべて、元気になり、公園などにあそびにでました。

エキモスは、そういう子供たちとあそぶのが、なによりたのしみでした。公園の木には、たくさんすずめの雀がいました。エキモスは子供たちとあそびつかれると、木のかげにやすんで、銀色の葦あしがえ笛をふきます。すると雀たちが、笛の音ねにききとれて、エキモスのまわりにおりてきます。あたりいちめん雀ばかりです。子供たちがつかまえても、すこしもにげよう

とはしません。それを子供たちは、頭にとまらせたり、肩にとまらせたり、手のひらにのせたりして、うれしがっています。

「もうこれでおしまい」

そういつてエキモスが立ち上がって、笛をしまいますと、雀たちも木のうえにとんでいきます。

そのようにして、ある日、エキモスが公園で子供たちとあそんでいますと、まっ黒い服をきた一人の男が、しずかに近よってきました。大きなつよそうな男で眼がするどくひかっています。

男はエキモスのようすをじろじろながめてから、ひくい声でいいました。

「じつは、あなたにぜひごそうだんしたいことがありますので、あちらまできてくださいませんか」

エキモスはニコニコしていいました。

「ここではいけませんか」

「ええ、ちよつと……ひみつのことですから……」

それでエキモスは、その男についていきました。公園のではありませんに、馬車がまっていま

して、黒い服をきた大きなつよそうな男が四人のついでにきました。エキモスはいわれるままに、その馬車にのりました。馬車はいつさんにはしりだしました。

五

エキモスをのせた馬車は、どこまでもはしつていきました。くろい服をきたつよそうな五人の男が、エキモスをかこんでいました。

ずいぶんいつてから、馬車は大きな石の門をはいりました。そこでエキモスは馬車からおろされました。あかい服をきて剣をさげてる五人の男が、くろい服の男とかわつて、エキモスをとりかこみました。

エキモスにはわけがわかりませんでした。でもべつにこわいともおもいませんでした。あかい服の男たちにつれられて、大きなたてもものなかにはいり、ながいひろい廊下をとおつて、ちいさな中庭にでました。そしてそこで、じやりのうえの木の腰掛こしかけにすわらせられました。

やがて、正面の幕がまきあがりました。中庭より一だんたかい部屋のなかに、大ぜいの

人がひかえていました。

あかい服の男の一人が、エキモスにいました。

「王さまと大臣だ。おじぎをしろ」

エキモスはおじぎをして、顔をあげました。みると、まんなかに、金のかんむりをかぶってむらさきの服をきている人が、王さまらしく、そのすこし前のほうに、ぴかぴかひかる服をつけているのが、大臣らしゅうございました。そのほかの人たちは、赤や金のすじのはいった服をつけて、王さまの左右にならんでいました。

大臣はおごそかな声で、エキモスにたずねました。

「お前は、なんとという名前だ」

「エキモスというものです」とエキモスはへいきでこたえました。

「エキモス、お前は魔法つかいだな」

「いいえ、魔法つかいではありません。山の羊かいです」

「その羊かいが、どうして、公園の雀すずめをよびあつめるのか」

「よびあつめるではありません。雀があつまってくるんです」

「それでは、なんのために、びんぼう人どもの町に、金貨をまきちらすのか」

「みんなをよろこばせたいからです」

「その金貨は、どこからぬすんできたのか」

エキモスはへんじにこまりました。しかたがありませんから、金色の皮かわぶくろ袋をとりだして、そのふしぎな力をみせてやりました。銅貨や銀貨をいれると、金貨にかわりますし、石ころをいれても、金にかわってしまいました。

大臣はあかい服の男たちにさげびました。

「その魔法の袋をとりあげて、しばつてしまえ」

エキモスは皮袋をとりあげられ、うしろでにしばりあげられました。どうすることもできませんでした。

大臣はいいました。

「お前は、けしからんやつだ。魔法をつかって、むほんをたくらんでいる。しかしもう、魔法の袋をとりあげたからには、どうにもできないぞ。かくごするがよい」

エキモスはいろいろいいわけしましたが、なんのやくにもたちませんでした。びんぼう人たちのところに金貨をまきちらして、はたらくのがばかばかしいという気をおこさせ、公園で雀すずめをよびあつめて、みんなのきげんをとり、そして神さまのお使いだなどといふ

らして、むほんをたくらんでいる、というのです。

「これから、七日のあいだ、森のなかの牢ろうにとじこめて、それから、島ながしにいたします」

大臣は王さまにそうしました。王さまはだまっとうなずきました。

それで、おしまいでした。エキモスは森のなかの牢屋にいれられました。だいじな笛までも、牢屋でとりあげられてしまいました。

森のなかに石でこしらえられて、兵士たちだけがばんをしている、おそろしいさびしい牢屋でした。エキモスはそのにとじこめられ、七日たてば、舟にのせられ、川をくだって海にいで、海をとくわたって、人の住んでいないちいさな島にながされるのでした。

けれど、エキモスはさほどかなしみませんでした。なんにもわるいことをしたのではありません。今にだれかたすけにきてくれるような気がしました。

牢屋には、ちいさな窓が一つついていました。その窓からのぞくと、森の木がみえます。木のしげみをおして、むこうに野原がみえます。エキモスは、山で羊かいをしていたときのことを、なつかしくおもいだしました。

——羊たちはどうしてるだろう。

そして毎日、その窓から、森の木やむこうの野原をながめてくらししました。だが、野原には人のかげもみえません。だれもたすけにきてくれるものはありません。

三日たちました。四日たちました。だれもきてくれません。五日……六日……七日……だれもきてくれません。森のなかはしいんとしていますし、森のむこうの野原には人かげもありません。

八日目の朝、いつも食事をはこんでくれる番人が、エキモスをかわいそうにおもってか、こういいました。

「いよいよきょうは、島にいくんだ。なにかねがいはないかね」

エキモスはすぐにこたえました。

「なんにもありませんが、ただ、なごりに、笛をふかしてください」

「うむ、きいてきてあげよう」

しばらくたつと、番人は白^{しろ}葦^{あし}でこしらえた銀色の笛をもってきてくれました。

エキモスとはびあがつてよろこびました。そのだいな笛を胸にだきしめて、なみだをながしました。それから一心^{いっしん}に、笛をふきはじめました。なんともいえないうるわしい音^ねがひびきわたりました。エキモスはもうなにもかもわすれて、むちゆうにふきつづけま

した。いく時間ふきつづけたか、じぶんでもしりませんでした。

そのうち、なんだかさわがしいので、エキモスは気がつきました。そして窓からのぞきみると、びつくりしました。

森のなかいっぱい、鳥や獣けものばかりでした。鷲わしや狼おおかみやライオンのようなおそろしいものもまじっていました。エキモスの笛をききにやってきたのです。牢ろうの番人たちはにげだしてしまつて、だれもいません。ただ鳥や獣ばかりです。

エキモスは笛をふきやめて、ぼんやりそれをながめていました。ふと気がつくと、森のむこうの野原のなかに、なにかうごいています。だんだんちかよってきます……。たくさんの人が、馬をかけさしてやってくるのでした。

六

エキモスがとじこめられている牢屋へ、馬でかけつけてきたのは、王さまと王子でした。大臣もおとめています。それからおおくの兵士がしたがっていました。

はじめ、エキモスが牢屋へおくられた時、皮かわ袋ぶくろは、魔法の袋だといって、大臣から

王さまの手にわたされました。王さまはそれを、じぶんの部屋にもってかえって、ふしぎそうにながめました。みごとな金色の鹿しかの毛皮でした。そしてその毛をなでてみるうちに、ふと、魔法とかいうのを、ためしてみたくまりました。

王さまはその皮袋に、銅貨を一ついれてみました。とりだすと、金貨になっています。小石を一ついれてみました。とりだすと、黄金おうごんになっています。

王さまは、うれしさに眼をひからしました。そして銅貨や小石をとりよせては、皮袋にいれて、みな黄金おうごんにしてしまいました。くたびれてくると、大臣をよびました。つぎには、ごてんじゆうの役人をよびました。小石や銅貨をはこぶもの、それを皮かわぶくろ袋にいれて黄金にするもの、その黄金を部屋のすみにつみかさねるもの、おおさわぎでした。黄金がだんだんふえてゆくのをみて、みんなむちゆうになりました。

一日たちました。一つの部屋が黄金でいっぱいになりました。二日たちました。二つの部屋が黄金でいっぱいになりました。

王さまに、エキモスとおなじくらいな年ごろの王子がありました。王さまはじめみんなが、黄金をこしらえて、むちゆうになってるのをみて、かなしそうにいました。

「そんなことをして、なにになりますか」

でも、だれもへんじをしませんでした。

三日……四日……五日たちました。五つの部屋が黄金でいっぱいになりました。

王子はいいました。

「そんなことをして、なにになりますか」

だれもへんじをしませんでした。

六日たち、七日たちました。七つの部屋が黄金でいっぱいになりました。

王子はかなしそうにいいました。

「そんなことをして、なにになりますか」

だれもへんじをしませんでした。がこんどは、みんな、たがいに顔をみあわせました。

そしてため息をつきました。くたびれていました。なんだかきびしくなっていました。七

つの部屋にいっぱいおうごんの黄金の山をみて、どうしていいかわからなくなってきました。

王子はいいました。

「石ころをつんでるのと、おんなじではありませんか」

じっさい、黄金ばかりこしらえて、なにになるんでしょう。こうなると、石ころをつん

でるのおなじでした。これまであんなにとうといものとおもっていた黄金も、七つの部

屋いっばいほどになると、どうにもしようがありませんでした。

——ばかなことをしたものだ。

そうかんがえて、王さまは大臣のほうをみました。大臣も王さまのほうをみました。二人ともこまつてしまいました。

そして、八日めの朝になると、七つの部屋いっばいの黄金をまえにして、王さまも大臣の役人たちも、ただため息をつくばかりでした。

そこへ、いちどに、いろんな知らせがまいりました。——人民たちは、エキモスが牢ろうにとじこめられて、いよいよ今日は島ながしになるんだということを、いつのまにかききだして、たいへんさわぎたっています。ぜひともエキモスをうばいかえすとさわいでいます。——エキモスがむほんをたくらんでたということも、びんぼう人たちのところへ金貨がまきちらされるのを、ねたんてる者どもが、かつてにこしらえた話です。——そして牢屋のほうでは、ふしぎにも、数かぎりない鳥けものや獣がやってきて、牢屋から森まで、すっかりせんにょうしてしまっています……。

王さまは立ち上がりました。王子も立ち上がりました。すぐに馬をひきださせて、牢屋ろうやのほうへかけさせました。それを気づかって、大臣はおおくの兵士をつれて、あとにした

がいました。

きてみると、ほんとでした。牢屋のまわりの森のなかは、鳥や獣けものでいっぱいでした。驚わしや狼おおかみや獅子ししのようなおそろしいのもまじっています。馬はおどろいてはねあがりました。王さまも王子も大臣も兵士たちも、馬からとびおりました。牢屋の窓には、にこにこしてるエキモスの顔がみえます。けれども、鳥や獣のためにちかよれませんでした。

そこへ、エキモスをうばいかえそうとして、たくさんの人民たちがやってきました。王さまはすぐに、エキモスをゆるすということをふれさせました。人民たちはあんしんしました。けれど、森のなかの鳥や獣をみて、エキモスのところへはちかよれませんでした。

そのうちに、王子はなんとおもってか、一人で森のなかにはいっていききました。ふしぎにも、狼や獅子もじつとうずくまったまま、なんの害もしませんでした。王子はずんずんすすんで、牢屋のなかにはいり、かぎをさがして、エキモスの部屋をあけました。

エキモスはよろこんで王子をむかえました。

王子は金色の皮かわぶくろ袋をエキモスにかえしていました。

「エキモス、お前はその皮袋で、わたしたちにたいへんよいことをおしえてくれました。人間の欲というものが、どんなにばかげてるものか、おしえてくれました。ありがとう」

王子のあとについて、王さまもはいつてきました。王さまはいいました。

「エキモス、わしのおもいちがいだった。お前をくるしめたのを、ゆるしてくれ」

王さまのあとから、人民たちがとびこんできました。どうするひまもありませんでした。人民たちはエキモスをおつぎあげて、牢屋ろうやからつれだし、野原のなかにはこんでいきました。

それからたいへんなさわぎでした。都じゅうの人が野原にでてきて、王さまも、王子も、大臣も、兵士も、かねもちも、びんぼう人も、みないっしょになって、エキモスをおんげにするおまつりさわぎをしました。

おまつりさわぎは、一日じゅうつづきました。

そのさわぎのなかで、エキモスはなんだかさびしくなりました。もう都には用がないような気がしました。山の羊たちのことがおもいだされました。そしてその夜おそく、エキモスは葦笛あしぶえと皮袋かわぶくろをかかえて、そつと都をたのきました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀の笛と金の毛皮

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>